



● 第 3 回 全国障害学生支援コーディネーター研修会を開催

去る 6 月 27 日～28 日、東京三田のキャンパスイノベーションセンターにて、第 3 回全国障害学生支援コーディネーター研修会が本学主催で開催されました。本研修会は、全国の大学等で障害学生支援コーディネートの業務を専門に担当する職員およびそれに準ずる職員の方々に対して、障害学生支援の意義と役割について議論する場を提供し、また聴覚や視覚に障害を有する学生の支援コーディネート業務に活用できる知識や技術を提供し、障害学生支援の質的向上に資することを目的としています。



1 日目の様子

今回は、北は北海道から南は沖縄まで、全国の大学や関係機関から 45 名の障害学生支援担当者が集いました。2 日間に渡って活発な意見交換が行われ、多くの知見を得ることができましたので、ここにご報告します。

● 1 日目【講演】

1 日目は、障害学生支援という活動そのものを問い直すために、4 本の講演が企画されました。

はじめに「障害学生支援論・総論 振り返りと展開」(本学 長南 浩人 准教授)をテーマに講演があり、障害学生支援において最も重要な原則は、教育活動の補充であることが示されました。次いで基調講演「障害学生支援の歴史と展望」(日本福祉大学 大泉 博 教授)では、大学における障害学生の問題の歴史と反省、そこから見えてくる課題が整理され、これを受けて、各論講演 1「障害学生支援論・法の視点から」(東京大学 長瀬 修 特任准教授)、各論講演 2「障害学生支援論・教育学の視点から」(福岡教育大学 太田 富雄 教授)で、障害学生支援を多角的に捉えるものとして、法と教育の視点が提示されました。

● 2 日目【分科会】

2 日目午前は、2 つの分科会に分かれて行われました。

視覚系分科会「障害学生とコーディネーターのための楽ラク資料作成」では 2 つのテーマを設け、「簡単な資料は点訳ソフトで作ろう」(静岡県立大学 石川 准 教授)では、実際に点訳ソフトを用いながらの実習を行いました。また、「ロービジョン向け資料はこうして作ろう」(東京女子大学 小田 浩一 教授)では、ロービジョンの見え方と効果

的な支援方法を学習し、明日から使えるテクニックを習得することができました。

聴覚系分科会「ノートテイクチームを強化する 100 の方法」では、東京ボランティア・市民活動センターの河村 暁子氏をアドバイザーに迎え、聴覚障害学生支援をより盛り上げるための具体的な方法について、参加者から出された意見を元に、テーマごとに 5 つの小グループに分かれて検討しました。グループでの話し合いでは、聴覚障害学生・支援学生・教員など、立場別にアイデアを整理し、相互の関係性を線で結び提示する様子が見られ、課題に対峙する際に多角的な視点が必要であることが明らかになりました。また、河村氏のアドバイスから、協働する相手を知ることの重要性を確認することができました。

● 2 日目【全体ワークショップ】

午後は、グループディスカッションを取り入れたワークショップを実施しました。参加者にはあらかじめ事例を提示し、対処方法を考える課題を出してあり、当日はその方法をグループ内で発表し、ディスカッションを行いました。聴覚障害学生が参加するゼミ場面では、単に通訳を付けて終わるのではなく、ディスカッションリーダーを置いて議論の流れをわかりやすくしてはどうか、などの意見が出され、障害学生支援は教育活動の補充であるという原則に立脚した、従来の型にはまらない支援のあり方の提案に盛り上がりました。さらに、何を重視したためにそのような支援になったのか、なぜ同じ事例に対して対処方法が人により異なるのかを分析しました。これにより、事例を分析的に捉え筋道を立てて考える力、多面的な見方で新たな視点に立ち支援方法を検討する力という、コーディネーターに必要なとされる能力を伸ばすことができました。



全体ワークショップの様子

2 日間を通して、障害学生支援における新たな視点が数多く提供され、大変充実した研修会になりました。研修会の開催にあたり協力いただいた先生方に改めて御礼申し上げます。

障害者高等教育研究支援センター 准教授 白澤 麻弓

● 韓国障害者雇用促進公団（KEPAD）と交流協定



協定締結後の村上学長とキン・ソンキュウ理事長

平成 21 年 6 月 8 日 月曜日に本学と韓国障害者雇用促進公団（KEPAD）は国際交流協定を締結しました。本学としては 13 番目で、韓国に限ると、韓国国立再活福祉大学、韓国ナザレ大学、韓国国立特殊教育院に続く 4 番目の交流協定締結機関となります。

● 韓国障害者雇用促進公団について

KEPAD は、障害者の就業を通して安定した生活と完全な社会参加を実現し、加えて、企業の障害者雇用を通じた社会貢献を支援するために、障害者の職業リハビリ及び雇用促進事業を遂行することを目的として、1990 年 9 月 1 日に設立された準政府機関で、表 1 の具体的目標を掲げ、表 2 の事業を図 1-1 及び 1-2 の組織構成で行っています。役割や組織構成は、わが国の「高齢・障害者雇用支援機構（厚生労働省所管）」と似ていると言えます。

表 1) 目標

- (1) 働く場を求める障害者と、人材を求める事業主が共に満足するよう、地域社会の就業斡旋サービスとの提携、関係強化を通じて、障害者の多数雇用が可能なモデルを開発し、職業能力の向上を支援する。
- (2) 障害者の雇用義務制度を効果的に活用し、障害者の勤労の場を確保すると共に、事業主が障害者雇用を通じて企業の社会的責任を果たすことができるよう、様々なサービスを提供する。
- (3) 障害者の雇用政策及び制度についての研究を進め、障害者に適した職種の開発と職業の拡大や職業生活に必要な補助工学装備の支援を通じ、障害者の職業生活の質を向上させる。
- (4) 国内及び海外の関連団体と協力して障害者への理解を醸し、障害者に対する社会的な理解の促進に向け活動する。

表 2) 主な事業

- (1) 雇用促進事業：障害者支援サービス、専門的職業能力評価サービスを提供、重度障害者支援など。
- (2) 雇用環境改善事業：障害者雇用奨励金の支援、障害者雇用施設資金の融資及び支援、障害者雇用管理費用の支援、障害者雇用在宅勤務の支援、障害者雇用事業場への経営コンサルティング支援連携雇用対象事業場の管理・支援、優秀雇用事業主の選定・支援、多数雇用事業場の管理・支援職業斡旋費用の支援など。
- (3) 情報管理事業：全国的な就業斡旋のための雇用情報システム運用、職業リハビリに関する研究資料の提携サービス、障害者への情報化教育など。

● 協定式と目的及び効果

協定式は、本学から村上 芳則 学長をはじめとする一行が KEPAD 本部（盆唐（プンダン））を訪問し、午後 4 時から大会議室にて、キン・ソンキュウ理事長と、協定を取り交わしました（写真参照）。また、一行は協定に先立ち、同日午前中に KEPAD の一翼を担う一山（イルサン）の職業能力開発センターを見学しました。

本協定の目的は、KEPAD の職業能力開発センターにおける核心事業である障害類型別 特性化教育システムの安定化に向けて、両国のノウハウの共有を図ることと、人的交流を通して相互理解を進めることです。この協定を通して本学はこれから KEPAD と視覚・聴覚障害者関連の学術交流や専門家交流などを推進していく予定です。

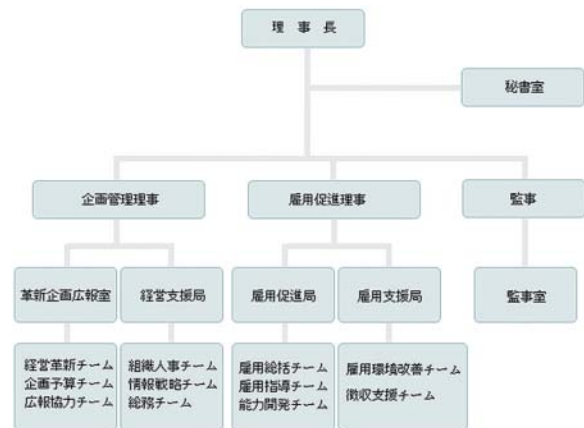


図 1-1 本部組織図

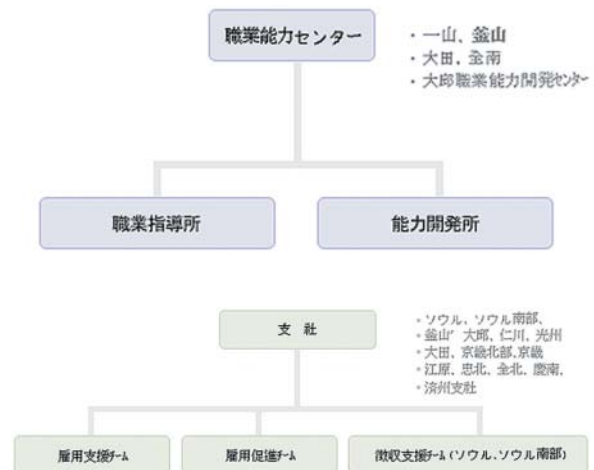


図 1-2 職業能力開発センター（5ヶ所）と支社（14ヶ所）

アジアにおいて、両障害者への質の高い教育実績を有するこの二つの機関が協調することは、国際的にも意味があり、障害者職業技術専門教育の水準を一段と向上させる契機になることが期待されます。

国際交流委員長 教授 一幡 良利

● マルチモーダル図書『天文学入門』を刊行

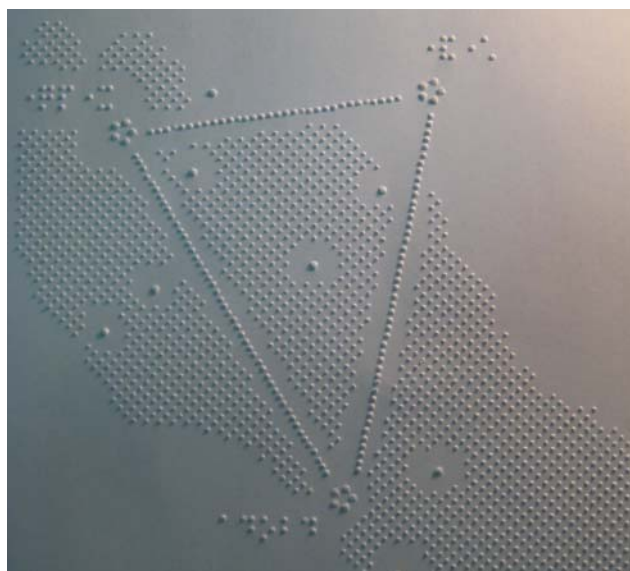
大学の基礎教育系科目の教科書としても使える天文学入門書が、活字版・点字版・録音版・電子版の4媒体で発行されました。これを行ったのは本学 障害者高等教育研究支援センター。文部科学省の特別教育研究経費で実施している視覚障害者用学習資料の整備を図るプロジェクトの成果の一つです。多くの人々の協力で完成した本書は、すでに教育現場などで利用されはじめています。

● 本学のプロジェクトに天文学者らが協力

「マルチモーダル図書」は、触覚でも聴覚でも低視力でも読める図書という意味を込めて同プロジェクトが提案した用語です。その構想の実現への協力を、天文学者の嶺重慎さん(京都大学大学院教授)と天文教育研究者の高橋淳さん(茨城県立水海道第一高校教諭)が表明。本学側も、天文学書には天体の写真や概念図、数式や化学式の掲載が欠かせないことから、学習資料を対象とする同プロジェクトの目的に適していると判断し、平成19年秋に二人に原稿の執筆を依頼しました。

● 多くの協力者との連携で多媒体化

マルチモーダル図書では、どの媒体でも等しく確実に読み取れる必要があることから、原稿段階での検討が重要でした。監修を担当した本学では原稿の読み返しを重ね、点字読者に理解しやすい表記、音声読み上げに適した表現、形や色彩を適切に説明する文言などの観点から、種々の問い合わせや依頼を著者に対して行いました。同時に、「写真や図表もふんだんに取り入れ、それを視覚障害者にきちんと伝えたい」という著者の強い想いに沿って、点図(凸点で描いた触読用の図)の製作に力が注がれ、試作と調整が繰り返されました。そのようにして文章や図表を作り上げていく過程では、しばしば意見の対立も起きます。触覚や聴覚、低視力での読み取りやすさを追求したいという想いと、サイエンスとしての天文学の厳密さを損なってはならないという想いが様々に交錯するためです。そうしたときに有効だったのが、視覚障害当事者の助言や指摘でした。特に天文教育普及研究会に所属する藤原晴美さんら視覚障害者が大きな役割を果たしました。このほか多媒体化には、点訳者や音訳者、編集者をはじめ多彩な人々が関わり、多くの技術やノウハウが活用されました。



点図 夏の大三角形

こうして完成したマルチモーダル図書の各媒体版についての要点は次のとおりです。

＜活字版＞ 有限会社字游工房が開発した視認性の高いフォントを使用。

＜点字版＞ 点字データと点図データを一体化したエーデルブック形式でCDに収録。添付の点字・点図印刷ソフトウェアは藤野稔寛さん開発。

＜録音版＞ 障害者向け録音図書の国際規格であるデージー(DAISY: Digital Accessible Information System)形式でCDに収録。添付の再生ソフトウェアは日本障害者リハビリテーション協会からの提供。

＜電子版＞ 株式会社ボイジャーが提唱するドットブック形式(低視力者への対応や音声化が可能)でCDに収録。添付のビューアは同社が開発。

● 学習資料の一つのあり方を提言

今年3月に発行された本書は、全国の盲学校(視覚障害系特別支援学校)と点字図書館、そして希望のあった天文施設、公共図書館、教育機関などに寄贈されました。盲学校の理科の授業や教員研修で教材として活用されている事例があるほか、「普通小学校で学ぶ全盲の児童に今回の点図を授業で触読させたところ、本人ばかりか周囲の晴眼(視覚に障害のない)児童たちも強い関心を示し、点字や点図についての関心が深まった」との報告もありました。本書を読んだ視覚障害者からは、「これまで接する機会がなかった天文学の世界を知ることができ、新たな興味が湧いてきた」、「点図に触れながら録音を聞くと理解しやすい」などの感想が届いています。また、点訳者や音訳者からは「教科書などを手がけるときのヒントが得られ、参考になる」といった意見が寄せられています。これらのことから、今回の刊行は、視覚障害者用学習資料のあり方についての一つの提言になるものと期待できます。

本書についての問い合わせは、電子メールで

onose@k.tsukuba-tech.ac.jp へ。

障害者高等教育研究支援センター 教授 長岡 英司
視覚障害系支援課 小野瀬 正美



完成したマルチモーダル図書『天文学入門』

● 韓国国立特殊教育院での国際シンポジウム



シンポジウム終了後の記念写真

本学と交流協定を結ぶ韓国国立特殊教育院 (KNISE 旧 KISE) において、平成 21 年 6 月 10 日、日本 (本学)、アメリカ (South Carolina UNIV.)、中国 (北京連合大学) と韓国 (国立ソウル大学) から代表者を招聘し、「特殊教育対象者の学業達成度についての国際的動向」というテーマで第 16 回の国際シンポジウムが開催されました。シンポジウムでは、日本、米国、中国、韓国における障害者の学業達成度について各々報告がありました。日本からは、本学の村上学長による「日本の特別支援教育対象者の学業達成度とその評価－聴覚障害児を中心に－」と題して講演と討論が行われました。このシンポジウムは全席指定席で、韓国国内から特殊教育を専門とする教育委員会や韓国福祉大学、韓国障害者教育関連学校や大学の教員など、約 100 名の方々の参加がありました。

● 日程

- 6 月 9 日： シンポジウム事前の打ち合わせ
- 6 月 10 日： 国際シンポジウム
- 6 月 11 日： 次回の開催国、日程、テーマなどについて意見交換

● 参加者のテーマと概要 (発表順)

- (1) Dr. Mitchell L. Yell (サウスカロライナ大学教授)
「アメリカの特殊教育の評価：法と政策としてのイシュー」
障害学生の学業評価に関する法的論争点、及び学生の学業面での進歩を引き出すために教師に求められる内容を紹介しました。加えて、過った学業評価をする場合や、このような過ちを防止する方法、そして合理的評価に至る方法について説明しました。
- (2) 村上 芳則 (筑波技術大学学長)、長南 浩人 (准教授)
「日本の特別支援教育対象者の学業達成度とその評価－聴覚障害児を中心に」
聴覚障害学生と学習障害学生を中心に日本の特別支援教育対象学生の学業成就の検討を重点に置いた。現在日本では特別支援教育対象学生の学業成就に関する国家水準の資料が収集されていない、したがって特別支援教育において教育的責務性を高めるためにこれに対する調査と研究が求

められる。

(3) 曲 学利 (北京連合大学院長)

「中国の障害学生の学業成績と審査体制：法律と制度的問題、展望及び個別案」

中国障害学生の高等教育実態および展望を扱ったことで障害学生が大学教育を成功的に遂行することができるように中国政府および学校で規定している多様な審査体制に対して発表した。

(4) キム ドンイル (国立ソウル大学教授)

「韓国障害学生の標準化教育：学業成就の検査調整について現状と展望」

韓国の標準化学業成就検事の検事調整に対する現在状態と展望に対する示唆する点を得るために、評価と検事調整、特殊教育対象学生学力評価制および評価調整制導入、大学修学能力試験の特別管理指針、各障害領域者別に国内検事調整研究を眺望してみた。



左から

オ ユジョン研究員 (韓国)、村上 芳則学長 (日本)
曲 学利院長 (中国)、Mitchell 教授 (米国)

● 国際シンポジウムの意義と成果

特別支援教育 (特殊教育) について理解を広げてそのネットワークを構築し、支援対象学生の教育の質と学業達成度とその評価案についての模索が本シンポジウムの目的でした。

成果としては、参加各国は、国家の競争力強化の一つと捉え、特別支援教育対象者に対し、学校教育の体系的な質の管理に、法的措置を含め、政策的・国家的な次元の努力を払っていることが分かりました。日本の特別支援教育も、情報保障や障害補償の研究、障害者支援センターなどの運営により量的な発展を遂げていますが、これから教育の質の改善や向上に、他国が持っている様な国家的指針は参考となる内容でした。

産業技術学部 総合デザイン学科 准教授 劉 賢国

● 張 晴原教授「2009 年日本建築学会賞」受賞

産業情報学科・環境安全システムコースの張 晴原 教授が、2009 年日本建築学会賞(論文)を受賞しました。受賞対象となった研究論文は「中国における建築熱環境解析と設備設計のための標準気象データベースの開発に関する一連の研究」です。



写真1 学会賞賞牌(表と裏)

日本建築学会賞は、近年発表された研究論文で、学術の進歩に寄与する特に優れた論文を対象としており、分野を集大成した論文や独創的な単独の論文、あるいは新しい分野や境界領域の論文まで幅広く考慮し評価するものです。今回の受賞は、同教授が長年に渡り中国における建築熱環境解析と設備設計用標準気象データベースの開発が挙げられ、暖冷房負荷の地域特性解析や中国の住宅エネルギー消費原単位の解析と国際比較、ならびに日本と中国の住宅省エネルギー基準の比較など優れた研究を行ってきたことが評価されました。

● 受賞における評価点

1. 中国の暖房ディグリーデーと冷房ディグリーアワーの地域分布を解明し、住宅熱環境設計のための気候区分を提案した。
2. 中国の360都市と日本中国以外の20のアジア都市における標準年気象データ及び設備設計用気象データを開発し、中国の建築エネルギー解析の基礎を築いた。
3. 中国主要都市における気温、日射量、相対湿度及び絶対湿度の年変動を調べ、各都市におけるこれらの気象要素の変動特性を明らかにし、変動している気温における標準年気象データの位置づけを明らかにした。
4. 標準年気象データに基づいて、集合住宅モデルのシミュレーションを行い、中国における住宅の暖冷房負荷の地域特性を初めて解明し、地球温暖化を背景とした暖冷房負荷の年変動を定量的に解明した。

5. 中国の標準気象データベース開発の一環として、毎時日射量モデル、月積算日射量モデルと年間積算日射モデルを開発し、中国における年間積算日射量の地域分布を明らかにした。

6. さらに、Gompertz関数を用いて毎時水平面全天日射量の直散分離モデルを開発し、分離精度を向上させるとともに、任意の晴天指数における直散分離が1つの分離式でできるようにした。

7. 中国の都市別、地区別における住宅エネルギー消費原単位を解明し、日本と米国とカナダとの比較を行い、それらの国々の相違点とその原因を明らかにしました。中国の住宅省エネルギー基準から各地域の熱損失係数基準値を導き出し、日本の住宅次世代省エネルギー基準との比較を可能にした。



写真2 受賞式における受賞業績の紹介

これらの研究は、既存の研究方法の継承に止まらず、地球環境時代における建築環境工学の斬新な視点から研究を展開し、独創的な成果が得られています。本研究の成果は、建築における省エネルギーや、自然エネルギー利用、住宅省エネルギー基準の改良、CO₂排出量の削減及び地球環境保全への貢献が極めて大きいものです。今回の受賞は本学の教育研究レベルの向上につながるものと期待されています。本学の教員がこのような大きな賞を得たことは誇らしいことであり、大学人として最高の賛美を送ります。

産業技術学部 産業情報学科 教授 藤澤 正視

平成21年度 学園祭のお知らせ

平成21年度 筑波技術大学 産業技術学部 及び 保健科学部の学園祭開催予定日は次のとおりです。詳しい日時や内容は追ってウェブページでお知らせします。どうぞお立ち寄り下さい。

産業技術学部 学園祭 開催予定日
保健科学部 学園祭 開催予定日

平成21年10月31日 土曜日～11月1日 日曜日
平成21年11月14日 土曜日～11月15日 日曜日

● 全日本鍼灸学会学生ポスター部門の受賞に思う ―未知のテーマに挑んだ学生たち―

● はじめに

「ポスターナンバー 281 番!」、大ホールに響きわたった審査委員長の声は今も耳元を離れません。さいたま市の「大宮ソニックシティ」で6月に開かれた全日本鍼灸学会学術大会の学生ポスター部門表彰式の思い出です。

この部門で、視覚障害教育で初めて、筑波技術大学保健科学部鍼灸学専攻4年の中村文信、知念勇二、坂井保昭、木村和訓の諸君が卒論で取り組んだ調査研究が優秀賞に輝きました。以下、指導に当たった立場から、発表に至るまでの経緯や受賞の意義などについて振り返ってみたいと思います。



ポスターセッション発表中の中村君

● 研究の経緯

全日本鍼灸学会では、若手育成事業の一環として、昨年からポスター発表に学生部門を設けています。発表者の中から優秀賞5本を表彰することで、未来の鍼灸界を担う学生たちの学業・研究を奨励しようという企画です。2回目となった今年は基礎医学、臨床医学、安全管理、社会調査などの領域から26演題(鍼灸大学16題、専門学校10題)のエントリーがありました。どの発表も洗練された内容で昨年に続く盛況でしたが、視覚障害教育界からの参加が技大の1題しかなかったことが惜しまれます。図らずも、その看板を背負う格好になったわけですが、ある種のプレッシャーの中で、初参加ながら優秀賞を射止めた彼らの健闘に心からの拍手を送りたいと思います。「視覚障害者のための高等教育」を任じる大学にとっても、面目躍如たるアピールになったのではないのでしょうか。

さて、彼らが発表した演題は、「整形外科医院における鍼灸マッサージ師の雇用実態と意識に関する調査」。卒業後の進路や就職問題を考える授業の中から生まれたテーマでした。

わが国の鍼灸あん摩業や病院のマッサージ部門は視覚障害者の基幹職域として発展してきた歴史があります。しかしながら、近年、晴眼鍼灸師の急増や無免許あん摩業者(整体やリフレクソロジーなど)の大量参入で、業の環境は一変しました。一言でいえば、かつてない過当競争が生まれているのです。この変化は、現役の業者だけでなく鍼灸学校を巣立つ学生、ことに視覚障害学生の進路にも深刻な

陰を落とすようになりました。

私が担当する科目(鍼灸介護福祉学)では、学生の職業意識を高めるために、こうした社会的事象や就職問題について学生自らが調べ討論し解決策を話し合う時間を取り入れています。ところが、病院・診療所については、就職先としての期待度が大きいにもかかわらず、鍼灸を導入している医療機関の数や従事している鍼灸師数、マッサージ師数など市場の基礎となる統計がほとんど整備されていないのが現状です。この分野の発展性や就職先を考えようにも、その糸口さえないのです。「ならば、自分たちで調べてみよう!」。こうして、平成19年夏、この研究がスタートし卒業論文へと発展していきました。

● 研究のオリジナル性

調査は、仙台市、新潟市、新宿区、大津市、山口市、那覇市の6市区で「整形外科」を単科で開業している医院104件のすべてにアンケート調査票を郵送する方法で行いました。その結果、診療行為としてマッサージを取り入れている医院が3分の1を占めた一方で、鍼を導入している医院は1割に満たないこと、鍼施術を担当する人の3人に2人が医者であること、鍼灸マッサージ師の雇用を予定している医院は希少であることなどの実態が明らかになり、「鍼灸マッサージ師の就職先として整形外科医院は有望職域とは言い難い」という、「残酷」な結論を導き出さざるを得ませんでした。

このように、鍼灸を学ぶ学生には夢の一角が潰えるような厳しい結果でしたし、予算、時間などの制約でサンプル数にも課題を残した研究でしたが、それでも、この現実を初めて明らかにした一点において、学術的な意義は大きいのです。おそらく、このオリジナリティーが受賞の一番の理由だったのだらうと推測しています。

● プレゼンテーション力とデザイン性

ところで、彼らが受賞の幸運に恵まれたもう一つの理由に、発表役を務めた中村君の熱演とポスターのデザイン性をあげなければなりません。「ポスター発表」というのは、会場にしつらえられた畳み1枚ほどのボードに研究成果を



表彰後の記念写真

(左から指導教員の藤井、木村君、知念君、坂井君、中村君、審査委員長の坂井先生)

まとめた印刷紙を張り出しておく形式です。発表者は、聴衆の取り巻きの真ん中に立って短い時間内に成果をアピールしなければなりませんから、発表内容だけでなく、プレゼンテーション力やデザイン性も大きくモノを言うのです。

視覚障害者の場合、ポスターを読みながらの発表は困難です。事前に、発表原稿、図表の内容や番号などを頭に叩き込んでおかなければなりません。強度弱視の中村君も、そのハンディを克服し、指示棒の持ち役に回った木村君とのコンビネーションよろしく、よく通る声で堂々と発表をやり遂げました。下級学年も参加してくれた前夜のリハーサルでの教訓やポスター会場に駆けつけてくれた仲間たちの応援のたまものといっていいいでしょう。

一方、黒を背景色にした技大のポスターは、会場に居並ぶポスターの中でもひときわ目を引いていましたし、文字

の大きさなど視覚障害への配慮が行き届いたものでした。このデザインの製作には、本学の笹岡知子助教と光岡裕一客員研究員が助っ人として協力してくださいました。

● おわりに

素朴な疑問や身近な問題の中に未知のテーマがたくさん転がっています。そのことを実証して見せた4人のチャレンジ精神と健闘が、後に続く学生たちの励みや目標になってくれるなら、これに優る喜びはありません。最後に、準備から本番に至る過程で、彼らを支え励まして下さった筑波技術大学の学生と先生方に感謝し、稿を終えたいと思います。

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻 准教授 藤井 亮輔

● 聴覚障害系 就職委員会 平成21年度 就職支援活動を開始

聴覚障害系就職委員会では、平成21年5月11日開催の就職委員会において、平成21年度就職委員会の活動計画を決定し、現在、4年生の就職内々定に向けた学生への個別支援を行うとともに、平成23年3月卒業予定の3年生向けの就職支援活動を開始しました。学生においても3年生が先輩である4年生から就職活動の厳しさを聞いているため、真剣に取り組む姿勢が感じられました。



第2回就職ガイダンス・就職模擬試験の説明をする石原教授

今回、既に実施された第1回から第3回までの就職ガイダンスについて報告します。

● 第1回就職ガイダンス

平成21年4月22日、天久保キャンパス講堂において、産業情報学部の3年生31名、4年生21名の計53名の学生が参加して第1回就職ガイダンスが実施されました。始めに、「就職活動における身だしなみと着こなし」のテーマのもと講演と実演が行われましたが、この企画は、学生が就職活動を進める上で欠かせないリクルートファッションのマナーと常識を身につけてほしいとの要請から、民間服飾業者の協力により実現したものです。講演は、面接時に清潔感が溢れる好印象とアピール度をアップするための、身だしなみと、スーツ着こなしポイントについて説明があり、学生は熱心に受講していました。続いて、学生が演壇に出て実演があり、企業面接からガイダンスに直行したW君は満点の評価を得ていました。引き続き、石原障害者高等教育研究支援センター(聴覚障害系就職委員会委員長)教授から、面接対策のポイントについて説明があり、

石原教授が学生に質問をし、学生が応えるという形式の模擬面接の演習があり、学生の回答内容や回答方法に対して、何が欠けているか、どのように修正すればいいか等、具体的な指導が行われ、特に4年生にあっては、就職活動を進める上で大きなプラスになった模様です。

● 第2回就職ガイダンス

第2回就職ガイダンスは、平成21年6月3日、214教室において、産業情報学部学生35名が参加して、就職活動に向けたガイダンスと就職模擬試験としてSPI試験が実施されましたが、就職模擬試験については学外演習等で当日参加できなかった14名も含め49名の学生が受験しました。

始めに、石原教授から、平成23年3月卒業予定となる3年生が就職活動を始めうえて心掛ける必要のある「就職活動に向けて」の就職活動スケジュール、企業が行う入社試験の種類等の基本的事項と現在の就職難や平成最大の失業率について説明がありました。引き続き、就職模擬試験としてSPI試験が実施され、3年生を中心に受験しました。SPI試験は言語系と非言語系の問題からなる総合能力適正検査で就職試験では必須のもので、実際の就職活動に向け各自対策が取れるように比較的早い時期に模擬試験を実施したものです。

● 第3回就職ガイダンス

平成21年7月1日、天久保キャンパス講堂において、産業技術学部の学生34名が参加して第3回就職ガイダンスが実施されました。面接実践講座として実施されたもので、始めに、職員採用面接の経験がある中嶋聴覚障害系支援課長から「就職活動の第一歩」と題して講演があり、続いて石原教授から会場の学生による実際の面接の実演に対するポイント指導が行われました。中嶋課長からは、面接対策について面接の形式と流れや各種面接での主な面接事項について説明があった後、会場の学生の髪型や服装について直接指導が行われました。引き続き、会場の学生2名による模擬面接が中嶋課長等を面接官として行われ、場面ごとに対応上の問題や課題について、石原教授から学生自らが面接官に話しを伝える努力する必要がある等、具体的な指導が行われ、社会一般の面接試験における厳しさとコミュニケーション上の留意点を学ぶ貴重な場となりました。

聴覚障害系支援課 鈴木 清

● 第10回筑波技術大学国際シンポジウム 2009 の開催案内

本年度も国際交流委員会では恒例の国際シンポジウムを開催します。記念すべき第10回目となります。第8回、第9回は日本、中国、韓国の大学間交流締結校を中心にアジアにおける障害者の高等教育の現状、入学状況、就職状況についてのシンポジウムを開催してきました。中国、韓国の障害者高等教育の現状を把握することが出来、将来の留学生受け入れについての進歩的な意見も聞くことができました。

今年度はタイと韓国からシンポジストを招聘し、両国の障害者高等教育の現状と教育方法・支援などについて、新たな視点から解説していただくことになりました。学内はもとより、学外の皆様とも活発な意見交換をしたいと企画しましたので、是非参加していただけることを願っています。また、本学の教職員の教育・研究の取り組みの発表の場として、ポスターセッションを設けますので、併せてご討論していただければ幸甚に存じます。

なお詳細は、本学ウェブサイトに掲載しますのでご覧下さい。

開催日：平成21年10月1日(木曜日) 本学開学記念日

場 所：筑波技術大学 天久保キャンパス 大学会館講堂

今年度のテーマ：「障害者高等教育と雇用の現状」

講演Ⅰ 講演者：Pimpa Kachondham 先生 所属：ラチャスダ大学(Ratchasuda College, Thailand)

演題：「タイの高等教育における障害支援サービス」

講演Ⅱ 講演者：Kim SunKyo 先生 所属：韓国障害者雇用促進公団(KEPAD)

演題：「韓国における障害者高等教育と雇用状況」

国際交流委員会

● 本学の平成22年度入学 試験日程表

